

のせの教育の魅力を伝えていきます

教育長だより



文責 辻 新造

Vol.5
8▶9

2025
Aug.▶Sep.

TOPICS

戦後80年 能勢の歴史を未来へ



第二次世界大戦終結から80年が経ち、日本は平和国家として歩んできました。しかし、戦争を経験した世代が少なくなり、記憶の継承が難しくなっているのが現状です。

今回の「教育長だより」は、戦後80年という節目の夏に、戦時中の能勢、戦争、平和、そして命について考えるきっかけとなることを願っています。ご家族・ご親戚・ご近所で「戦争と平和」について語り合う機会になれば幸いです。

1

半世紀にも及ぶ平和登校日の意義



能勢町は、半世紀にわたり夏休み中の8月6日に全校登校日「平和登校日」を実施しています。

この取り組みは1973年に天王小中学校で始まりました。能勢町天王地区の深山にミサイル基地建設が計画されたことがきっかけです。3年後には歌垣小学校と東郷小学校、さらに翌年の1977年には、能勢町内のすべての小中学校とお隣の豊能町にも広がりました。

子どもの頃、平和登校日の日は、先生方が戦争劇などを通して、戦争や平和について考える機会を作ってくださり、「二度と戦争をしてはいけない」というメッセージを伝えてくださいました。

「ひとりでは平和は築けない。」「一人一人がいのちの尊さを感じとり、いのちの重みを他人と共有してこそ平和を築いていける。」そうした思いを共有することが平和登校日の意義だと感じています。



2

文集「おじいちゃんおばあちゃんの戦争体験記」



私自身、校長として4年間、全校児童生徒や6年生に向けて、戦時中の能勢の様子を話す機会がありました。戦後世代が戦争体験を伝えるには限界があると感じています。久佐々小、東郷小、田尻小、歌垣小と、6年生の担任を6回経験し、子どもたちが祖父母や地域のお年寄りから聞き取った戦争体験記集を作成してきました。

この夏、能勢ささゆり学園の教職員研修に招かれました。戦争体験記を聞き取り文集にまとめた教え子世代が現在、教員となり「戦時中の能勢」について学びたいと参加してくれました。貴重な資料を生きた教材として後世につないでほしいと願っています。



この「教育長だより」について、ご意見や感想がありましたら、ぜひお聞かせください。

[教育長だよりご意見ご感想フォーム](#)

3

岐尼地区

奥西清子さんの戦争体験記

岐尼国民学校4年生の時に太平洋戦争がはじまり、14歳の時に終戦を迎えた。B29が轟轟と音を立てて能勢にも飛んできた。城山・大池・山辺付近にも焼夷弾が落とされた。お父さんやおじさん、近所に人がどんどん兵隊になっていった。どこの家も、お年寄り、お母さん、子どもだけで、寂しい日が続いた。爆弾が落ちたところへ消火活動にいったバケツリレーをした。

学校では、婦人会の人が竹槍訓練をしていた。学校からお宮さん（神社）へ日の丸の旗を振って、出征兵士の見送りをした。夜、電気のあかりが他にもれないように黒い布をかぶせた（灯火管制）。ご飯の代わりに「おかゆ」「おいものゆがいたもの」「メリケン粉にかぼちゃや麦をふかしたもの」を混ぜて蒸しパンにしてごはん代わりにした。



イメージ画像

4

歌垣地区

故・矢立宏彰さんの戦争体験記

15歳のとき学徒勤労動員で軍需工場に召集された。行き先は宝塚仁川の航空機製作所。軍需工場は空襲の標的になりやすい。1945年7月24日、六甲山の方角から14機の爆撃機が10分おきに攻めてきて、1トン爆弾を投下した。工場や寮が全滅。多数の死者が出た。空襲警報が何度も出され、防空壕内でなくなった人も多かった。死体がゴロゴロと置いてあるところを見て避難した。その後、自宅で待機して終戦を迎えた。

戦争中、日本が負けていることを一切国民に知らせなかった。広島や長崎の原爆投下についても「新しい爆弾が落とされたい」程度のニュースの扱いだった。教育一つでどうにでもなる。



イメージ画像

5

久佐々地区

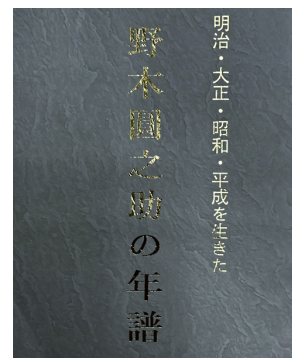
故・野木圓之助さんの戦争体験記

22歳で徴兵検査に合格。現役兵として入隊。会社に勤務。40歳で戦時召集令状が来る。1942年広島宇品港からパラオ・ニューギニア方面に出航。1943年10月戦病兵として帰還して阪急百貨店に復職する。阪急女子挺身隊合同訓練責任者を務める。

1944年社命によって日本海軍の軍属員となり、西能勢村の下田において西能勢村高等科生徒を学徒勤労動員で迎え入れる開墾栽培責任者となる。同時に宿野北山で海軍用の木炭生産の総監督の任務にあたり奔走の毎日過ごす。

終戦時、1945年9月宿野方面の赤痢大流行で母を亡くす。1948年アメリカ進駐軍の命令で久佐々小にあった忠魂碑が取り外され、路傍に捨てられていたものを宿野の友人と共に大里地区の月峰寺下（畑国）移築を実施する。

戦時中の能勢に関して、勤労動員の貴重な史実が年譜に記録されている。



6

写真でみる 能勢の戦時中の様子



なぎなた訓練 東郷国民学校



出征兵士を送る行列 田尻国民学校



出征兵士の武運長久を祈願する 田尻原林神社



集団学童疎開
大阪市立西淡路国民学校6年生 神山慈眼寺

7

平和を守り抜いた能勢の人々

戦後、能勢のまちは再び大きな試練に直面しました。1970年6月、防衛庁が能勢町天王地区の深山に「ナイキミサイル基地」を建設するという計画が浮上したのです。

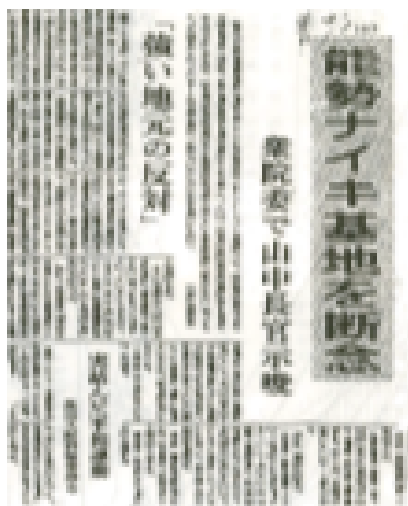
この場所は、見晴らしが良く、晴れた日には日本海まで見渡せる風光明媚な場所でしたが、軍事的な価値が評価された場所が、平和な町に暮らす人々にとって、不安の種となりました。



沖縄県嘉手納基地



深山からの眺め



能勢の人々や平和を願う人々が能勢町に集まり、学習会を開催し続けました。この計画に対し「ノー」を突きつけました。

「能勢は平和で自然豊かな町にしたい」「戦争に向かう国にはしたくない」「子どもが戦場に行く国にはしたくない」という強い願いを胸に、7年間におよぶ反対運動が展開されました。

これは単なる抗議運動ではなく、近隣の町の人々とも学び合い、平和な社会とは何かを深く考える時間でした。

1977年3月18日、新聞は「能勢ナイキ基地を断念」という見出しで、計画断念を報じました。これは、能勢の人々が自らの手で平和を守り抜いた、誇り高き歴史です。この出来事は、地域の人々が団結し、強い意志を持てば、大きな困難をも乗り越え、自分たちの未来を自分たちで切り拓けるという、確かな希望を示しています。

8

平和への誓い

教員になりたての頃、語り部の佐伯敏子さんから聞いた「ヒロシマには歳はないんよ」という言葉が今でも強く印象に残っています。原子爆弾が投下され亡くなった人々の命は「あの日のまま」止まっているから歳をとらないという意味です。

平和は、ただ待つだけでは訪れません。一人ひとりの学びと行動によって築かれ、守られていくものです。私たちは教育を通じて、子どもたちに平和の大切さを伝え続けることができると信じています。

能勢町では戦没者追悼献花式を続けてきており、平和への誓いを強く意識する重要な行事として脈々と受け継がれています。戦没者の方々に対して心から悼の意を表すとともに、未来に向けて平和な世の中を築いていけるように、足元から見つめなおし、ともに考えあって、行動できるようにしていきたいと思います。